

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

問題作成の基本方針は、従来どおり「高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する」という大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の目的に基づいたものであった。とりわけ、高等学校学習指導要領で「良識ある公民として必要な能力と態度を育てる」ことが「倫理」という科目の目標とされていることを踏まえ、高等学校の段階における基礎的な知識の習得とともに、人間としての在り方生き方について思索を深め、現代に生きる人間の課題について主体的に考える態度と基礎的な能力の習得もが問題に反映されるよう意を注いだ。このため、こうした課題を盛り込んだリード文を提示し、また関連する資料読解を適宜織り交ぜることで、基礎的知識を具体的事柄に即して把握する理解力や思考力の判定と併せて、それらをもとに社会なり自己なりが当面する具体的な問題について倫理的に考えていく応用的な思考力や判断力を問えるよう配慮した。

今年度の設問の形式はおおむね昨年度のものを踏襲したが、特に「青年期の課題」と「現代と倫理」の二つの分野については「倫理」という科目の基本性格がより明確になるように留意、工夫した。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 青年期の心理的特徴として、「自我の目覚め」「生きる意味の模索」などが、あげられる。しかし、悩んでいるのは、青年だけではない。青年期が、自分自身を見つめ、自己を確立していく初めての時期だとすれば、親世代にあたる成人期は、危機を感じたときに、いったん確立した自己の問い直し、再確立が求められる時期である。

本問題においては、受験者に対し、親世代に当たる成人の自我同一性の状態を知ること、そして、その比較を通して、現在の自分の状態（青年期における自我同一性）が、発達的に見てどういう時期なのかということについての理解を深めてもらうことに主眼を置いた。

問1は、統計データの読み取り問題である。この問題を通して、20～70歳までの、様々な世代が、どのようなことに悩んでいるのか、その悩んでいる内容の世代毎の違いについて知り、そのことによって現在の自分の悩みの質についての理解を深めてもらうことを意図したものである。問2は、成人世代の様々な悩みを、個人の述懐という形で取り上げ、その中から、特に、「自我同一性の危機」の状態の選択を求めた。青年期だけにあるわけではない、成人期以降にもあり得る「自我同一性の危機」についての、深い理解を意図したものである。問3は、エリクソンの理論を援用し、生涯発達の視点から、青年期～老年期までの各発達段階が、心理的に見てどのような時期であるのかを理解してもらうこと、そのことにより、青年期という時期の特徴についての理解を一層深めることを意図したものである。

第2問 源流思想を通して人間の復讐^{ふくしゅう}心と復讐^{ふくしゅう}について考える。リード文では、ギリシャ・中国・インド・キリスト教・イスラムの先哲たちがいか^{いかに}にして憎悪^{えんこん}や怨恨^{えんこん}を乗り越えて復讐^{ふくしゅう}心を克服しようとしたか、また、寛容の心を喚起したり対話を促したりしてきたかを見ながら、復

讐を自分自身の問題として考え、それを通して現実社会に目を向け、高等学校学習指導要領の「人間としての自覚」を高めることをねらいとした。

問1 [4]は、『クリトン』で語られるソクラテスの「ただ生きることでなく、善く生きること」を明示し、ソクラテスが「仕返し」を否定したことを意味を考えさせようとした。

[5]は、孔子が重視する「忠恕」を、単に語句として知っているだけでなく、「他者に対する思いやり」を意味する「恕」を「仁」と区別して正確に理解しているかどうかを問うた。

問2 古代ギリシャの思想から、エピクロス（アタラクシア）、メソテース（アリストテレス）、プラトン（エロース）、ストア派（アパテイア）、キーワードと思想内容を正確に理解しているかを問うた。

問3 アリストテレスの言う「調整的正義」の意味を問うと同時に、「正義」の中身を考えさせようとした。

問4 人口に膾炙^{かいしや}している「復讐するは我にあり」の意味を考えることによって、リード文に引用した「左の頬をも向けなさい」が復讐を神に委ねることによって個人的復讐を抑止しようとしていることを理解させようとした。

問5 イスラムの喜捨は、為政者への献金ではなく貧者を助けるための貧窮税であること理解させ、イスラムへの理解を深める契機となることを期した。

問6 ブッダの教えを問う基本的な問題である。

問7 老子と荘子・孔子（儒教）・ブッダの思想的特徴を「生き方」をポイントにして理解することができる問題とした。

問8 リード文の趣旨を問うとともに、復讐あるいは復讐心を自分自身の問題として考えさせようとした。

第3問 他界を鍵語としたリード文に基づいて日本思想を通観し、重要な思想について、形式的な暗記ではなく内容を理解しているかどうかを問うことを目指したものである。具体的には、古事記から明治期の社会主義思想家まで、主要な思想の概要と基礎的な概念について、リード文の理解と連動するような仕方で問うように設問を作成した。全体として、現在も生きている他界観について考えることで、人間の存在理解と生き方とを主体的に問うきっかけとなることを志したつもりである。

問1 日本神話に対する基礎的な理解をめぐって黄泉国を、江戸儒学の基礎的な理解をめぐって林羅山を問うた。正答率は高かった。

問2 民俗学の基礎的な理解をめぐって、まれびとの観念を、リード文及び資料文の理解をも問う形で出題した。正答率は高かった。

問3 鎌倉新仏教以前の平安仏教に対する基礎的な理解をめぐり、『往生要集』における観想念仏について出題した。正答率は平均的であった。

問4 江戸時代の古学派の思想をめぐって、荻生徂徠の古文辞学について出題した。また、その学問の方法が後の国学に影響を与えたことを意識させる意図があった。正答率は平均的であった。

問5 神仏習合について、機械的な暗記でなく、「習合」という言葉の意味理解がしっかりなされていること、また具体例に即して判断できるかどうかを問う設問を意図した。正答率は

やや低かった。

問6 古典落語の素朴な会話から、当時の人々が、自らが死後に赴く他界として西方極楽浄土を意識していたことを、リード文の理解とともに、やや応用的に問うた。正答率は平均的であった。

問7 明治期の社会主義思想家である幸徳秋水について、その思想内容を素直に問う基礎的な出題を意図した。正答率は平均的であった。

問8 各設問と連動したリード文の趣旨を的確に読み取れるかどうかを問う設問である。正答率は高かった。

第4問 高等学校学習指導要領の「現代に生きる人間の倫理的課題」を主体的に考えていくためには、「理性」のあり方についての反省が必要である。そこで本問は、西洋近現代思想における「理性」を主題とし、合理論と啓蒙主義、またドイツ観念論から実存主義・プラグマティズム、さらにはフランス現代思想など、西洋近現代における様々な「理性」についての考え方を問えるようにリード文を作成した。そして、そのリード文をもとに基本的な学習事項を問うとともに、高等学校学習指導要領の「良識ある公民」としてどのように「理性」を生かしていくのかを考えることができるよう作題に配慮した。

問1 [22]空所補充問題ではあるが、単なる知識ではなく、ドイツ観念論の思想内容の理解を問うように配慮した。[23]思想史の基本的な知識を問うた。

問2 西洋近代において科学や哲学、宗教などの理解をめぐって重要な役割を果たしたフランス啓蒙思想の理解を問う問題である。

問3 西洋近代の「理性」が、デカルトにおいて、身体から切り離されたものとして出発したことを問うた。

問4 功利主義における行為の正邪に関する判断の仕方がどのようなものか、キーワードではなく、日常的な表現から判断できるかどうかを問うた。

問5 現代思想における「理性」批判の端緒として、人間の現実存在は「理性」によって回復できるものではないというキルケゴールの実存思想の理解を問うた。

問6 思考の意味を行動に即して考えるパースのプラグマティズム思想の特徴を、資料を通じて問うた。

問7 現代フランス思想における「理性」批判の四つの事例を取り上げ、フーコーの理性批判を問うた。

問8 リード文の文脈を踏まえつつ、「良識ある公民」の判断としてふさわしいものを選択させる問題とした。

第5問 倫理学において多くの先哲たちは正義概念をめぐって思索を重ねてきたが、第二次世界大戦という人類規模の悲惨を経験した後、具体的な他者に対する配慮を説く「ケア」が倫理学の関心の一つに加わったことをテーマとした。ケアの倫理は、近い関係に適した倫理と考えられがちだが、平和や公正を求める国際的な取組にも密接にも関連していることに気付いてもらうことを意図し、リード文を作成した。一般的に正しいとされているルールにただ従うだけでなく、受験者が自分とは異なる環境におかれた具体的な人々にも関心を向ける機会の提供を心掛けた。

- 問1 「正義」を中心に考える思想家の一人であるハーバーマスを取り上げ、「対話的理性」とはどのような理性であるかについての知識を問うた。
- 問2 既存の正義概念の枠組みを越えた問題を提起している「人道に対する罪」と関連させて、第二次世界大戦後の国際平和と非人道的な行為に対する国際社会の取組についての知識を問うと同時に、そうした問題への関心を引き起こすことを目的にした。正確な知識を求めたため、正答率は低かった。
- 問3 第二次世界大戦後、子どもや女性、人種に基づく差別をなくし、あらゆる人を公平に扱おうとする潮流が生まれたことについて、知識を問う問題。問2と同じく、受験者には難しかったようである。
- 問4 現に苦しんでいる人の苦痛をいかに緩和すべきか、という倫理的な関心に関連させて、現代の医療現場における「ケア」についての知識を問うた。
- 問5 80年代以降、正義論を見直す大きな契機となったケアの倫理について考えさせる問いであり、倫理学に大きな影響を与えたキャロル・ギリガンの文章を実際に読むことで、「ケアすること」と正義を尊重することとの違いについて深く理解させることを目的とした。
- 問6 現代の日本社会における家族や夫婦の関係性について、いかなる変容を遂げているかについての知識を問うた。
- 問7 これまでの小問を踏まえた上で、リード文全体の趣旨を把握させるとともに、正義とケアとの関係をめぐって倫理的思考力を見ようとした。

3 出題に対する反響・意見についての見解

本年の「倫理」の本試験の受験者数は昨年度に比べ微増した。また、平均点は71.51点と高めであった。この点に関しては、「基本的な知識に基づく理解や応用力についてバランス良く問われており妥当なものであった」とされつつも、「難易度は全体としてやや易しい傾向が見られる」との評価や、問題によっては「選択肢に工夫が欲しい」との御指摘をいただいた。また、本年もリード文及び資料文に関して、「倫理的示唆に富む意義深い内容」であり、「受験者を大いに啓発するものが多かった」との高い評価を得、思考力を問う問題についても、「知識量に加え深い思考や判断を求めるような工夫がされていた」との評価をいただいた。今後とも、この水準を維持しながらも、学習の成果を多面的に試せるよう出題方法に創意工夫を積み重ね、難易度にも配慮した、「倫理」にふさわしい作問に努めていきたい。

第1問と第5問は、教科書の記述が必ずしも十分ではなく、また「現代社会」や「政治・経済」と共通性が高い分野であることから、従来から出題に苦慮してきているところである。特に第5問に関しては、高等学校学習指導要領で「主体的に追究する学習」が強調されている単元であることを踏まえ、発展的に現代の応用倫理の思想に至る倫理思想の意義を発見させる出題を盛り込むなどして、他の単元の学習の発展上に位置付いた「倫理」らしい問題となるよう工夫したが、「『倫理』独自の工夫が見られる」との評価を得る一方で、他単元との関連付けも含め「今後も検討をお願いしたい」との御指摘もいただいた。これらの大問については、出題形式についてなお一層の取組が求められよう。

第1問 全体的には、「青年期の特徴としての悩みを取り上げ、青年期だけではなく、人生を通

して常に自分と向き合うことで、人間が成長していくとするメッセージが表現されている」という評価がなされている。各問では、問1において、「『年齢層』『男女』『不安の内容』と複数の要素を検証するという点で、思考力や判断力が問われる」、問2において、「アイデンティティの拡散を具体的事例から判断させる工夫された設問である」、問3において、「総合的な判断力を求めている良問である」、とリード文、小問ともに高く評価されており、作題の意図が評価者に過不足なく伝わっているという感触が得られた。

ただ、難易度においては、「全体的に易しい問題である」「容易に正答できる」「誤答がはっきりしすぎている」「易しい設問である」との評価がなされており、この点については、実際の正答率も高く、納得するところである。

しかし、第1問においては、心理問題であるがゆえの特有の問題を抱えている。すなわち、問2、問3で見られるように、知識問題でないがゆえに、正答に結び付くヒントがないと正答の判断があいまいになり、多義的にとらえられる可能性が高まる。一方で、多義性、あいまい性を排除するために、ヒントを出したり、誤答性を高めると、問題としての難易度が低くなってしまう。そのようなジレンマがつきまとうのである。この点については、問題作成上の、今後の大きな課題となろう。

第2問 「現代社会の問題点を想起させる内容であるが、偏った思想に結び付く危険性もあり、リード文の意図するところが受験者に伝わりにくかったかもしれない」との指摘をいただいたが、源流思想を学ぶ目的は決して「過去の遺産」としての知識を蓄えることではなく、先哲たちの思索にヒントを得て現代社会に目を向けることである。その意味で、第2問は真剣に「現代社会の問題点」を考えるための問題となる。

今回、リード文に示したギリシャの例に限らず、「怨みを以て怨みに報いば、則ち民、懲る所有り」（『礼記』表記）に典型的に見られるように、古代社会では報復は勸善懲悪に有効であるとも考えられた。しかし、『老子』や『論語』にあるように、報復は更なる報復を呼ぶ現実に直面し、報復に対する懐疑が生まれている。また、有名な「目には目を……」は、今も報復を正当化するときしばしば引用されるが、実は無定見になりがちな復讐に、「目をやられたなら目、歯をやられたなら歯にとどめておくように」との制限を加える法であったし、人口に膾炙している「復讐するは我にあり」についても、間違った解釈をしている若者も少なくない。そのような思い込みや「偏った」見方を正すことも、源流思想の課題である。それは、問1で孔子の説く「恕（他者に対する思いやり）」を問うたのに対して「仁」と間違っただけで答えた受験者が3分の1もいたこと、問4「復讐するは我にあり」の正答率が低かったこと、問7では老子の説く「争いを避ける生き方」を、単純に「無為自然」という言葉だけで偏った理解をしている受験者が4分の1以上もいたことなどからも明らかである。しかし、全体的には、下位者の正答率が低く、中上位者の正答率が高い結果となっており、おおむね理想的な結果を示していると言える。ただ、問1 4 や問6については、誤答性を高めた結果、正答率が非常に高くなった。

まもなく裁判員制度が導入されようとしており、裁判が復讐の場となるのではないかと危惧する向きもある。そのような現実社会で、いずれ裁判員を経験するであろう受験者には、古来、先哲たちが克服しようとした人間の復讐心と、その対極にある寛容の心について考えてもらう

ことは、受験者一人一人にとって、必ずや大きな意味を持つことになるだろう。

第3問 倫理思想が、単なる知識を集積する科目ではなく、身近な問題を出発点として、世界理解や人間存在に対する哲学・倫理的考察へと深まっていく、生きた学問分野であることを伝えることを意図してリード文を作成した。そのため、「受験者に広い視野から考えさせるリード文」との評価をいただくことができたのは誠に有り難く、光栄であった。また、意図したよりも正答率の高い設問がいくつかあったため、「全体的に標準的な難易度の問題」との評価をいただけたことに^{あんど}安堵した。ただし、全体として、誤答選択肢がキーワードを直接的に明示するなどして際立つ傾向があったことは否めず、検討すべき点が残った。

問1 黄泉国を問うた設問は、「選択肢がいずれも基本的な語句であるため易しい問題」との評価であった。選択肢を工夫することでもう少し難易度を上げたかったが、教科書に採用されている語句から誤答を作成せざるを得ないため、結果として易しくなってしまったと感じている。林羅山についても、「上下定分の理」というキーワードがあるため「容易に解答できる」という評価であった。「上下定分の理」を書き下して開くなどして難易度を上げたかったが、字数の制限上難しかった。リード文の書き方そのものに課題が残ったかもしれないと感じる。

問2 「分かりやすい資料なので、易しい問題」との評価であった。その「分かりやすい資料」に対して、正答選択肢の文言「他界から運んできた宝」は正答であることを明示する文言であり、選択肢の作り方として検討すべき点であったと感じている。狂言を題材にすることで「ユニークな出題」との評価もいただいたが、選択肢はやや安全志向になってしまった。

問3 「他の選択肢が鎌倉仏教の宗派の特徴を明示しているので、解答は容易」との評価であった。正答率は平均的であり、結果的には特に易しい問題として機能しなかったようであるが、誤答選択肢の作り方については御指摘のとおりである。観想念仏という言葉が、受験者にはその意味内容を理解すること自体難しい概念であったことが、平均的な正答率にとどめたのではないかと推察する。

問4 「標準的な設問」との評価をいただいた。

問5 「標準的な難易度」との評価をいただいたが、正答率は低めであった。神宮寺、権現信仰などの具体例とともに、国家神道への言及によって、御指摘のとおり「判断に迷った受験者」がいたと思われる。教科書の記述内容をわずかにはみ出す部分を有する設問であった。

問6 「標準的な難易度の問題」という評価とともに、「ユニークな設問」との評価もいただくことができ、うれしく感じている。正答率は平均的であった。

問7 「標準的な難易度の問題」との評価をいただいた。

問8 御指摘のとおり「思考力を問う設問」であることを志した。「選択肢も工夫されている」との評価は有り難かったが、これも御指摘のとおり「内容が極端なものもあり容易に解答できる」面が確かにあり、実際に正答率も高かった。正答選択肢をまず作り、それと差別化を図りつつ誤答選択肢グループを作成するという作り方をしたが、結果として「白か黒か」という二分法的な選別が明示的に働いてしまったかもしれない。検討すべき点であると考えている。

第4問 全体としては、「それぞれの時代において思想家が考えてきた「理性」の概念の違いが

分かるように工夫されている」との言葉をいただき、また「教科書や授業では結び付けにくかった各思想家の考えが、本問を通して理解できた受験者も多いだろう」との評価を受けて、出題意図はおおむね達成できたものと思っている。また、各設問の難易度は「標準的」とされ、問題の「表現・形式等」に関してもバランスを保つことができていると評価された。「倫理」の問題として基準をクリアすることができたものと受け止めている。

問1 [22]については、単なる知識を求めるのではなく、指摘のとおり「カントとヘーゲルの全体的な理解」を問うものであった。「比較的容易な設問」との評価をもらい、また高等学校教科担当教員の方からは、空欄補充形式は受験者の学力の識別力が低いという意見もあったが、他の空所補充形式の問いより正答率は低く、相当の識別力はあったと判断している。

[23]については、基本的な知識を問うものであった。「正答と誤答の関連性をつけてほしい」と指摘を受けたが、誤答選択肢をも含めて「倫理」に関する幅広い知識や思考力を問う問題とするための工夫が必要だと思っている。

問2 ヴォルテールとロックの関係性についての記述が細かく、「やや難しい設問」と指摘された。他の設問が比較的容易であることを踏まえ、本設問ではやや細かい知識を問い、より深く学習している受験者の学習成果が評価できる問題とした。

問3 「基本的な概念の理解ができていれば判断できる易しい設問」との指摘どおり、正答率も高かった。各選択肢は、①を除いてデカルト思想に関連する用語を配置して、容易になりすぎないように配慮したが、正答の記述が教科書に即した記述であったため、設問としては易しすぎたかもしれない。

問4 指摘のとおり「キーワードでは判断しにくい」ように配慮した問題だが、空欄補充形式の問題を除いて最も正答率が高い問題となったのは、予想外のことであった。あらためて問題を見直してみると、最も常識的な考え方が正答と重なっており、これが正答率を高めた理由の一つだと思われる。結果的に、「倫理」の学習項目と言うより、常識的な判断力が問われる問題となってしまったのかもしれないが、内容の理解を問うという意味では、本形式の出題には十分な意味があると思われる。

問5 「標準的な難易度の設問」との指摘どおり、標準的な正答率であった。作題者としては、正答選択肢がキルケゴールの基本的思想の記述であり、はっきりとキーワードを使用しているため、問4よりも正答率が高くなると予想していたのだが、こちらの方が正答率は低かった。このような基本的な設問は、やはり欠かすことのできない出題だと思われる。

問6 「標準的な難易度の問題」との評価を受けたが、正答率は予想以上に高かった。問4とも共通するが、キーワードを外した読解問題に対しては、受験者は十分に対応できる能力を持っているということだと思われる。なお、本問については高等学校教科担当教員から『倫理』の問題になっていない」との指摘も受けた。「知識がないと解けない問題がもう少し多くてよい」との指摘と合わせて読むと、全体のバランスとしてやや読解問題が多かったのではないかという趣旨の発言だと思われる。本問は、一般にジェイズムに偏ったプラグマティズムの理解を、プラグマティズムの創始者パースの思想を読み直すことによって、プラグマティズムの豊かな思想的可能性を理解してもらうことを意図しており、内容的には十分に『倫理』の問題であると判断している。

問7 「標準的な難易度の問題」との指摘どおり、まさに平均的な正答率であった。「狂気」というヒントを入れておいたので、問6よりは正答率が高くなると予想したのだが、問4・問5の場合と同じく、キーワードを選択肢に入れて問うた本問の方が正答率は低くなった。問5に記したコメントがここにも当てはまると思われる。

問8 「思考力を問う工夫された設問」、また「標準的な難易度の問題」との評価をもらったが、正答率は低かった。「選択肢の誤答はそれぞれの表現が極端」と指摘されたが、他の選択肢を選択する受験者も相当におり、識別力のある問題であったと思われる。また「正答の『対話』はリード文から考えて必ずしも適切とは言い難い」と評価されたが、これは、「本文の趣旨に照らして」、「新たな展望」として「考えられる」ものを選択させる、従来の趣旨問から更に一步踏み込んだ設問形式にしたことによると思われる。趣旨問を単なる読解問題とするのではなく、「倫理」の問題とするための工夫であったが、選択肢は指摘のとおり更に練る余地があったかもしれない。

第5問 全体として、「現代倫理の分野から様々な内容や新しい考え方をリード文や設問に盛り込むなど、『倫理』独自の工夫が見られる」と評価していただき、更に「幅広い学習と資料を読んで分析する応用力を求めるといふ出題者の意図が伝わってくる」との肯定的な御意見をいただいた。また、リード文のストーリー性・メッセージ性を重視した大問形式についても、昨年度に引き続き「まとまりが出てきた」との評価をいただいた。現代的な知識の獲得だけでなく、新たに人類が直面する諸課題を「倫理」の問題として思考させる、という出題者の意図をくんでいただき、光栄である。

第5問は、「現代社会」や「公民」と共通する問題を「倫理」の問題として問う難しさがある。単なる知識問題や常識問題ではなく、いかに倫理的思考能力を問うのかについては、問題形式や内容について、今後更に検討していく必要がある。

各設問については、問2、問3について、「倫理」の教科書の範疇^{はんちゆう}を越える内容であるとの指摘を受けた。しかし、現代が抱える現実の諸問題が深く倫理的関心とつながっていることを明らかにしようとした問題であり、細かな知識を問うことを意図していなかった。だが、そのように理解されたことを重く受け止め、他の公民科科目といかに「倫理」を区分するかについては、問題形式など今後も検討を加えていかなければならないだろう。問4については、選択肢の文頭をそろえるべきであったと形式上の御指摘をいただいた。受験者が解答する際の読みやすさを考えれば、そうした配慮をするべきであったと反省している。さらに本問については、良問であるが知識がなくても解けるとの意見をいただき、知識問題と思考を問う問題とのバランスのとり方の難しさを感じる。

問5について、論理的な思考力や判断力を要求する「良問である」との評価をいただいた。資料を多用すると知識がなくとも読解力で解けてしまうことが懸念されているなかで、こうした評価をいただきうれしく思っている。問6は、常識問題となってしまう、評価でも「基本的な知識と判断力があれば容易に解答できる」と指摘された。評価のとおり、正答率はかなり高かった。現代社会にかかわる問題と倫理的思考との結び付きを持たせるための、なお一層の努力が必要であった。

問7の趣旨問に関しては、「選択肢にも工夫が見られる」と肯定的な評価をいただいた。趣

旨問では、リード文をいかに理解したかという思考力、判断力を見ることが意図されていたため、そうした意図にそった問題と評価されたことは喜ばしい。

4 今後の作題に当たっての留意点

本年度の出題に対する各方面からの意見、指摘、評価を踏まえ、以下の諸点に留意しながら、更なる良問の作成に努めたい。

- (1) 定評あるリード文形式の設問は継承しつつ、リード文と密接に関連して受験者に深く思考させる問題作りに努める。
- (2) 基本的知識をもとにしながらも、変化する社会に対応できる理解力、思考力、応用力を問う問題作りに努める。その際、難易度にも配慮する。
- (3) 第1問と第5問の作問方針とリード文のあり方について、更なる検討を重ねていく。